

平成 23 年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」 共同利用型公募研究報告書
日臺健雄(一橋大学)

2011年3月11日の東日本大地震の際、福島第一原子力発電所が1号機から4号機まで水素爆発を起こし、放射性物質(いわゆる「死の灰」)を広範に拡散させたことを受けて、原子力発電所の稼働に対して批判的な世論が形成されており、全国的に原子力発電所の稼働率は低下しつつある。この状況に対応して、総発電量に占める火力発電の比率が高まっているが、火力発電の燃料のうち、単位熱量当たり二酸化炭素排出量が相対的に少ないのが液化天然ガスであり、原発の代替エネルギー源として注目を集めている。現在、その追加的な供給源として、「シェールガス革命」に沸く米国やカナダとあわせて、隣国ロシアもプレゼンスを高めている。

このように、ロシアは天然ガスや原油といった天然資源の供給国としての側面に目を向けられがちであるが、一方で、ロシアには世界的な農業国としての側面もあることは意外と知られていない。穀物に限ってみても、エン麦やライ麦粉が物量ベースで世界第1位の生産を誇っているだけでなく、戦略的に重要な穀物の筆頭格である小麦も、物量ベースで世界第4位につけている(いずれも2010年。出所:FAO)。

そして、この農業大国ロシアは、2012年内のWTO(世界貿易機関)への加盟が確実視されていることから、世界の穀物貿易において今後プレゼンスを増していくことは言を俟たないだろう。このようなロシア農業の現況は、日本にとっても重要な意義をもつものと考えられるが、そのような問題意識を持ちつつ、今回「グローバル化下のロシア農業: WTO加盟問題と農産物貿易の動向」というテーマで共同利用型の機会をいただいた。

スラブ研究センター滞在中は、日本随一を誇るロシア関連の豊富な蔵書や新聞・雑誌類を渉猟し、充実した調査・研究をおこなうことができた。また、報告者は2011年12月から2月にかけてロシアに研究滞在する機会を一橋大学よりいただいたが(「社会科学重点大学連携強化に向けた若手研究者派遣事業」)、その準備の過程においてスラブ研究センターに属する若手研究者と交流する機会を得られたことは、非常に有益であった。今後は、研究論文だけでなく「JB Press」など一般向けの記事執筆によっても、成果を広く社会に還元する所存である。